

グローバル・ネクストリーダーズフォーラム 2015

本会議広島・東京大会
メキシコ地域会議

報告書

平成 27 年 10 月
グローバル・ネクストリーダーズフォーラム学生本部

グローバル・ネクストリーダーズフォーラム 2015 報告書
目次

第1部 本会議広島・東京大会

1. ご挨拶	p.3
2. 設立趣意	p.4
3. 運営体制	p.6
4. 後援体制	p.6

第2部 本会議広島・東京大会

1. 開催概要	p.7
2. 参加国・大学一覧	p.7
3. 開催スケジュール	p.7
4. セッション概要	p.9
セッション1	p.10
セッション2	p.11
セッション3	p.13
セッション4	p.15
セッション5	p.18
グループワーク	p.20
5. 観光・交流	
広島観光	p.21
東京観光	p.21
カルチャー・パーティー	p.22
6. 参加者感想	p.23
7. 運営フィードバック	p.24

第3部 地域会議

1. 開催概要	p.27
2. セッション概要	p.27
3. 統括	p.29

第4部 統括

1. GNLF2015 統括	p.30
2. 会計報告	p.31
3. ご連絡先	p.31

第 1 部 GNLF2015 組織概要

1. ご挨拶

平素より多大なご支援とご協力を賜り、誠にありがとうございます。皆様のご支援・ご協力のもと、グローバル・ネクストリーダーズフォーラム(以下 GNLF)は無事 2015 年本会議の全日程を終了することが出来ました。

弊団体は将来の世界を担っていくであろう世界中の大学生にグローバル・リーダーへの自律的な成長をとげるきっかけとなる場を提供し、かつ、そのような大学生が国境を越えた人間関係を醸成していくことを目的として 2010 年に発足いたしました。参加した若者たちがこの場を踏み台にして大きな成長を遂げ、将来的にグローバル・イシューに協力して取り組んでほしいという願いをこめて活動を続けております。そして今年は国内・国外開催を 2 度ずつ終え、5 年目に突入した節目の年でした。

GNLF には「経験」「知見」「人的ネットワーク」という 3 つの柱があります。そして昨年同様、「人的ネットワーク」こそが最大の財産だと考え、これを重視した活動を進めてまいりました。この報告書の主な内容は本会議の報告になっておりますが、私たちはその他にも様々な活動に精力的に取り組んでまいりました。昨年初めて開催した国内イベントの第 2 弾として、ジェンダーをテーマに留学生を含めた参加者同士が活発に議論するイベントを開催いたしました。また、民間外交推進協会様とのシリーズ企画も第 2 弾がスタートし、国内での活動につきましても継続性が保たれるようになってきております。それとともに、GNLF の知名度が向上してきていることも実感しております。

そして何より今年の 6 月にはメキシコにおいて初めての地域会議が開催されました。現地の学生によるメキシコ委員会を中心に、ラテンアメリカ諸国の学生が集まり、サステナビリティについて考えるということで、日本の学生本部からも数名派遣しました。GNLF のネットワーク、GNLF の輪が今後ますます強固になり、そして広がっていくことを願ってやみません。

このような、本会議を含めた GNLF の全ての活動は協賛者・後援者の皆様、講師の先生方を始めとして、多くの方々のご協力の上に成り立っております。改めて深く感謝申し上げます。

GNLF2015 は報告会を以て幕を閉じ、私自身は 10 月 1 日をもちまして会頭を退きますが、現役のメンバーを筆頭に GNLF は理念の達成に向けて今後ますます進化してゆきます。本会議の成熟度はますます高まっていくことでしょう。これからどうぞ皆様の温かいご指導とご支援をいただけますよう、心よりお願い申し上げます。

平成 27 年 9 月
GNLF2015 年度会頭
片岸雅啓(東京大学法学部 3 年)

2. 設立趣意

社会のフラット化が進展するグローバリゼーションにおいて、文化や習慣、宗教などの「差異」は強みになる一方で、これまでになく人々の間に摩擦を引き起こしています。差異を前提に、互いを理解し尊重する。それこそグローバル社会において最も重要な原則であり、また多様性を増す国内社会においても必要な姿勢ではないでしょうか。また、冷戦の崩壊とグローバリゼーションの進展で、あらゆる国家が他国との関係を抜きに存在し得ない時代が到来し、良好な外交関係を可能な限り多くの国との間に築くことの重要性は、いかなる国にとっても増しています。

私たちは、「国と国との関係も、人と人との関係から始まる」という信条のもと、多様性を増す国際社会において互いを理解し尊重する姿勢を持ち、自国を代表して諸外国と良好な関係を築く役割を果たすことのできる人間こそ、これからの日本に、そして世界各国に必要なのではないかと、そしてそのような人間こそ 21 世紀にふさわしい「グローバル・リーダー」なのではないかと考えるに至りました。

グローバル・リーダーは単にスキルを持った人間のことを指すではありません。差異を前提に互いを理解し尊重する態度や、急激な環境変化の中で柔軟に問題に対処する姿勢といった人格を含む、人間性そのもののことです。

ですからグローバル・リーダーを一朝一夕に形成することはできません。それは長期的な人間関係や人格形成・学習プロセスを通じて形成される人間性だからです。そこで私たちは、将来の世界を担う可能性と意思を持つ大学生が一堂に会する国際会議を「起点」として、数年～数十年の長きにわたりプログラムへ関与することを通じて一人ひとりがグローバル・リーダーへと自律的に成長できるような場を、そして彼らが人間的な絆を深めてゆくことのできるような場を創造することを決意しました。

私たちがそのような場の創造に取り組むに際して基軸としたのは、「一対一ではなく多国間のプロジェクトであること」「一会議で終わらない長期的なプロジェクトであること」「これまでにない国家間関係を積極的に構築するプロジェクトであること」という3つのコンセプトです。

プロジェクトを多国間で行うことは多様性を体感する上で不可欠であり、前述の通りその長期性も欠かすことができません。加えて、これまでの外交的枠組みが徐々に通用しなくなる中で、従来は比較的疎遠だった、あるいは一方的であった国家間関係を、相互の理解と信頼に基づいた対等で双方向的な関係に進化させることの必要性から、新たな関係を積極的に構築する意義は大きいのではないかと考えました。

それでは日本人が、そして日本が、この国際的なプラットフォームを主導する意義とは何でしょうか。

我が国では国際的プレゼンスの低下が問題となり、日本の将来について悲観的な声が蔓延しています。日本人は「外交下手」とも「内向き」とも評されます。さらに、東日本大震災で露呈したのは「世界に対して、必要な情報を正確に発信する力」「世界の言論と行動をリードし、よりよい国際社会を構築して行くリーダーシップ」の不足でした。各界において国を背負い国際的に活躍できるグローバル・リーダーの育成が、最も急務になっている国こそ日本だと言えるでしょう。そのような意味でこのプロジェクトを日本人自身が推し進める意義は大きいはずです。

しかしそれだけではありません。日本は世界に先駆けて第二次世界大戦後の高度成長を成し遂げた国であり、また世界に先駆けて金融危機や超高齢化を経験している「課題先進国」なのです。日本が直面してきた、そして直面している課題の多くはこれから世界が直面する課題です。そこで日本の知見や経験を大いに生かすべきではないでしょうか。そのような意味でこの「日本発のプラットフォーム」は日本にとっても、世界各国にとっても大きな意義があるものだといえるのです。

私たちはこの長期的な場において、各国を代表して参加する人々に対し「経験」「知見」「人的ネットワーク」を提供し、一人ひとりが自律的に成長できる環境の整備に尽力します。そして世界各国で求められているグローバル・リーダー育成の一端を担い、将来的にリーダー達の水平な世界的ネットワークを築き、ひいては多様な国々同士の良好な関係に結実することを目指します。

2010年7月1日
グローバル・ネクストリーダーズフォーラム
ファウンダー 森下 裕介
(2013年1月1日 一部改訂)

3. 運営体制

顧問教授：遠藤貢（東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻教授）

会頭：片岸雅啓（東京大学法学部 3 年）

事務局長：上代茉由子（上智大学外国語学部 3 年）

パートナーシップ局

田久保彰太（東京大学教養学部 2 年）

永松賢三（東京大学教養学部 2 年）

青野将大（東京大学教養学部 2 年）

メンバーシップ局

許卉玉（東京大学教養学部 3 年）

山出尚平（東京大学教養学部 2 年）

山本麻由（東京大学教養学部 2 年）

長谷川由斐（早稲田大学国際教養学部 2 年）

プログラム局

鶴澤和志（東京大学経済学部 3 年）

島崎諒子（国際基督教大学教養学部 3 年）

吉川仁（東京大学教養学部 2 年）

西田裕信（東京大学教養学部 2 年）

戦略局

嶋吉慧（東京大学教養学部 3 年）

井川真由（東京大学教養学部 2 年）

杉浦由佳（東京大学教養学部 2 年）

田村匠（東京大学教養学部 2 年）

4. 後援体制

【特別後援】

読売新聞

【協賛】

三菱商事株式会社

株式会社アイエスエイ

株式会社グロービス

【助成】

国際交流基金

双日国際交流財団

かめのり財団

渋沢栄一記念財団

第2部. 本会議広島・東京大会

1. 開催概要

会議名：

グローバル・ネクストリーダーズフォーラム 2015 年本会議 広島・東京大会

主催団体： グローバル・ネクストリーダーズフォーラム学生本部（学生団体）
（東京都文京区本郷 4-1-6 アトラスビル 6 階 IBIC ビジネスプラザ本郷内）

会期： 2015（平成 27）年 8 月 7 日～15 日（8 日間）

会場及び宿泊地：

8 月 7 日～8 月 10 日…広島ピースホテル

8 月 11 日～8 月 15 日…晴海グランドホテル

参加国（五十音順）：

インド／オーストラリア／エジプト／キルギス／スイス／日本／ブラジル／ブルガリア／南アフリカ／メキシコ

議題：戦争と平和

2. 参加国・大学一覧

インド：聖ザビエルコレッジ、ムンバイ（St. Xavier' s College, Mumbai）

オーストラリア：クイーンズランド大学（University of Queensland）

エジプト：カイロ大学（Cairo University）

キルギス：キルギス国立大学（Kyrgyz National University）

スイス：ジュネーヴ大学（University of Geneva）

日本：慶応大学、秋田国際大学、一橋大学、東京大学、ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン、横浜国立大学、国際基督教大学、お茶の水大学、東京理科大学

ブラジル：サンパウロ大学（University of São Paulo）

ブルガリア：ソフィア大学（Sofia University）

南アフリカ：プレトリア大学（University of Pretoria）

メキシコ：モンテレイ大学（Tecnologico de Monterrey）

3. 開催スケジュール

◆Day1（8/8）

～午後：参加者順次到着

夜：リセプション

◆Day2（8/9）

午前：オープニング・セレモニー

-開会の挨拶（会頭より）

-参加教授紹介

-参加者・運営委員自己紹介

-本会議における諸注意

-閉会の挨拶
-アイス・ブレイク
午後：セッション①
夜：グループワーク

◆Day3（8/10）

午前：セッション② 講演者-西田恒夫広島平和研究センター長・元国連特命全権大使
午後：フィールドワーク
広島平和記念資料館・原爆記念館・平和公園等、第二次世界大戦に関係する施設を地元の高校生と共に訪問。

◆Day4（8/11）

午前：移動（広島→東京）
午後：グループワーク
夜：文化交流会

◆Day5（8/12）

午前：セッション③ ウィリアム・バリガ国際移住機関駐日代表
午後：セッション④ 講演者-藤崎元駐米大使・日米協会会長
夜：グループワーク

◆Day6（8/13）

午前：セッション⑤ 講演者-貞広貴志読売新聞編集局英字新聞部部長
午後：最終発表準備
夜：最終発表準備

◆Day7（8/14）

午前：半日観光
参加者を事前にとったアンケートを元に班に分け、渋谷、浅草等の都内観光スポットを回ります。
午後：グループワーク発表、閉会式（場所：晴海グランドホテル）
16:30~
参加証明書授与式
17:00~
開会の挨拶
報告会（運営委員会より 団体概要-片岸 国内活動報告-井川 本会議報告-鶴澤）

18:00~19:00

グループワーク発表
地域会議紹介（上代）メキシコ委員会挨拶
会頭挨拶・閉会の挨拶（片岸）

19:00~21:00 懇親会

ファウンダー挨拶（森下）

◆Day8（8/15）

参加者順次帰国

4. セッション要約

＜議題＞

戦争と平和

＜議題設定理由＞

今回 GNLF として 2015 年本会議のテーマを「平和」と決定するにあたり、2 つのことを考慮いたしました。

1 つ目の理由は、2015 年が第 2 次世界大戦の終結から 70 年という節目の年であり、特に開催地である日本にとっては、改めて今までの過去と向き合わなければならない年であるということです。幸いにも終戦以降、日本は戦争を経験していないものの、周辺諸国との和解や領土問題や国内の基地問題、紛争地域への自衛隊の派遣などを含め、未だ第二次世界大戦という過去と正面から向かい合うことができていません。一方で世界的には、第 2 次世界大戦以降、世界は 2 つの陣営に分かれた冷戦を経験し、大規模な国家間の戦争というものとは起こっていないものの、世界各地で紛争が多発し、多くの人々が犠牲となりました。また近年においては、「テロとの戦争」という新たな戦争の形も生まれています。

本会議には、1815 年から永世中立国としての立場を守り続けたスイスや、第二次世界大戦以降戦争に参加しなかったデンマークなどの国から学生を呼ぶ一方、アラブの春を経験したエジプトや、日本と同様に国境問題を抱えるインドといった、さまざまな立場の国が参加します。そのことで、国内外の参加者にとってもさまざまな観点の共有が可能となり、本会議を通して多くの学びを提供できると考えられることに加え、1 週間の議論を通して GNLF として出した結論が、日本及び国際社会にとってメッセージ性のあるものとなることを期待しています。

2 つ目の理由は、GNLF の「将来リーダーとなりうる学生がグローバル・リーダーへと成長できる場を提供し、その後彼らが互いの協力のもとで、良好な国家間の関係を構築し国際的な課題へ対処することを目指す」という理念自体が、「平和」というテーマと大きく関係するからです。戦争や紛争の多くは、民族、宗教などの違いが間接的・直接的な要因とされていますが、世界各地から様々なバックグラウンドを持った参加者が 1 週間ともに生活をし、議論を交わしますが、そのこと自体が異文化間の理解を生み出し、「平和」を達成するための小さいながらも重要なことだと考えています。これまでの 4 回の GNLF 本会議においては、「教育」や「格差」といったテーマを設定していましたが、5 年目という GNLF にとっても節目となる年において、GNLF の理念をより直接的に示した大テーマを設定いたしました。

なお「平和」という概念は曖昧性を含み、また学問分野としても広範にわたるものですが、この本会議においては「国際社会」「国家・政府」「市民社会」という 3 つの階層にわけ、大テーマにアプローチすることにしました。また、本会議の前半では広島原爆資料館等を訪問することで戦争の普遍的な悲惨さを前参加者が共通して実感し、また現地の高校生との交流を行い平和教育のあり方を考えるなど、講義や議論の一辺倒にならないような工夫も取り入れました。

Session 1

-Students Presentation-

文責 山本 麻由

1. 概要

セッション 1 では一週間のプログラムの概略とセッションの意図や参加者に課された事前課題をもとに、自国の紛争の歴史について各参加国が 10 分程度のプレゼンテーションを行った。

2. プレゼンテーション

- オーストラリア
二度の世界大戦前は英国の植民地であったが 1901 年に独立した。
第二次世界大戦時には英米との同盟関係から参戦した。
- ブラジル
世界大戦への関わりはラテンアメリカ諸国の大戦へのかかわり方を象徴するかのよう、アメリカとの結びつきのために参加した。1988 年に軍政が打倒されてからは、積極的に平和維持活動にも貢献している。
- スイス
1815 年のヴィーン会議での宣言以来、永世中立国として名高いスイスであるが、その立地故に侵攻を受けて紛争が発生しかけた歴史を持っていたり、難民や移民の大きな受入国であるという一面もある。
- エジプト
オスマン帝国や英国の植民地であったエジプトは、その地政学的な重要性から、イスラエルとの衝突をはじめとした多くの紛争に巻き込まれてきた。しかし、エジプトの側から他国への侵攻をしたことは一度もなく、常に平和を指向している。
- インド
英国植民地であったインドは、第二次大戦後独立を達成したのち憲法で世界平和を希求し軍事同盟を避ける姿勢をとってきた。近年では P K O に積極的

に参加し、隣接諸国との紛争の解決にも成功している。

- メキシコ
第一次、第二次大戦ともに形式上の参戦にとどまったメキシコは、P K O をはじめとして世界平和のために積極的に活動しており、ラテンアメリカの牽引役として期待されている。
- ブルガリア
オスマン帝国から世界大戦にかけてのコンフリクトを中心に教授が概説した。
- 日本
日本参加者は日清戦争以降の日本の紛争の歴史を概説した。第一次大戦や第二次大戦時の日本と周辺国のパワーバランスについて説明した後に、憲法 9 条の解釈や安保法案をめぐる一連の問題についても言及した。最後には、西ドイツの首相ワイツゼッカーの “Anyone who closes his eyes to the past is blind to the present.” という言葉を引用して、戦後 70 年の年に過去を見つめなおし平和について考えることの重要性を述べた。

3. 統括

このセッションでは、本会議での議論の準備として、まず自国の歴史を知り、そして相手国の歴史を知るという目的があった。どの国もしっかりと準備をしてきてくれたように感じられた。また、普段なかなか知る機会がないような他国の歴史について、同世代の学生から説明を受けられたことも有意義であっただろう。

本セッションは、国によって様々なバックグラウンドを持っていることを改めて認識し、これ以降のセッションやディスカッションに向けた良いスタートダッシュを切るきっかけになったと考えられる。

Session 2

-The World in Turmoil; The Role of the Governments and Citizens-

文責 杉浦 由佳

1. 概要

セッション2は、“The World in Turmoil: The Role of the Governments and Citizens”と題して、西田恒夫広島平和研究センター長・元国連特命全権大使にお話を伺った。グローバル化がもたらす良い面は少なくはないが、同時に様々な問題も生じている。その問題に改めて焦点を当て、解決に向けて私たちは一市民として何ができるのかを考えるきっかけとした。

2. レクチャー

初めに、過去の歴史を振り返ることからセッションは始められた。人類は過去に二回の世界大戦を経験し、そこでは甚大な犠牲をこうむった。さらに、アメリカ合衆国とソビエト連邦はその後、イデオロギーの違いにより冷戦を開始した。ソ連解体とともに冷戦は終結したが、その後平和が続いたわけではなかった。アメリカはこれまで、イギリスからの独立に向けた戦争に始まり、数多くの戦争を経験してきた。第二次世界大戦ではアメリカ自身が初めて攻撃を受けたため、自国を守るために軍隊を拡大し、武器を開発した。



10年前に、トーマス・フリードマンは「フラット化する世界」という考えを提示した。グローバル化により、現在では、自国にいながら世界の経済に関わることができる。さらに、住む国に関わらず、世界的な問題解決に携わることもできる。世界的な金融市場ができ、アメリカやヨーロッパには移民の流入が続き、国をまたいだ協

力体制が構築されている。しかしながら、グローバル化にはマイナスの側面もあると西田氏は指摘し、グローバル化とは何か、私たちは自身に問い続けるべきだと述べた。西田氏自身はこの答えを、「あらゆるものの自由な流れ」とした。あらゆるものとは、サービス、金、そして最も重要なことが「人」である。人々は以前に比べ自由に動いているが、その理由は様々であり、全ての人が望んでそうしているわけではない。例えば、故郷の破壊や貧困によって移動を迫られる人々がいるのだ。人口が増加し続ける国がある一方で、先進国では人口が減少している。貧しい地域では平均年齢が20歳であるのに対し、日本をはじめとした国では高齢化が大きな問題になっている。こうしたことはグローバル化の最も難しい点であるという。

私たちが抱えている問題として、自然と人間によるものの二種類がある、と西田氏は述べた。自然災害としては東日本大震災とそれに伴う福島原発事故が記憶に新しい。日本は多くの自然災害を経験しており、被害を防ぐための多くの努力がなされてきたが、それでもなお、福島原発事故を防ぐことはできなかった。さらに、気候変動は自然災害の大きな原因になっている。日本では四季が失われつつあり、世界の各地で異常気象が発生している。私たちはこの問題解決に取り組んでいかねばならない。

人間の間での問題としては、子供や女性の誘拐や虐待、強制的な結婚、違法薬物やテロ、さらに臓器移植にいたるまで様々なものが挙げられる。世界を旅し、ただただ楽しむこともできるが、それと同時に周りで起きている悲劇に思いをはせることが必要だ、という。私たちはこのような悲劇をまるで映画でも見るようにしかとらえない。しかし、それらについてもっと深く考え、想像力を広げることが欠かせない。もし自分が当事者だったら、一体どうするだろうか、と。それだけではない、と西田氏は言う。私たちには武器も必要なのだ。そしてその武器とは「知ること」そして「協力」である。また、人権を迫害し続けている国がある中で、国際機関に助けを求めればよ

いのだろうか、との疑問を投げかけた。確かに国際機関は一定の役割を果たしているが、その力はあくまで限られたものであり、期待に達するものではないという。NGOといった組織もあるが、これが政府にとって代わることはできない。一人一人の力は小さいが、それが多くの人の票となったとき、変化を起こすことができるのである、と述べ、このレクチャーは閉められた。

3. 質疑応答

レクチャー後に「文化的多様性を受け入れることは平和の条件だと考えるか」という質問が投げかけられた。それに対し、西田氏は以下のように答えた。

多様性というものは私たちの生活を豊かにするが、同時に難しい問題ももたらす。例えば、移民は素晴らしい技術をもたらしてくれることがあるが、アイデンティティについての問題がある。特に日本においては、国家は一つの民族によって成り立っているという考え方が依然存在するが、もはや国籍によって国を定義することはできない。多くの国が異なる文化や宗教・宗派によってもたらされる問題に直面しているのだ。私たちは、歴史や文化、宗教といった



点において、他の人々の持つ背景をあるがままに理解しようとし、寛容になるよう努めるべきである。外交において、妥協というものは弱さだととらえられる。人々はまるで外交官を兵士のようにとらえ、犠牲を払うことを求めているようである。表面上では多様性というものは常に素晴らしいものであるが、現実にはそれほど簡単ではなく、悲劇的な結果をもたらす可能性さえある。私たちは共存していくためにさらなる努力をしていかねばならない。寛容さを持ち、和解することがその唯一の方法であり、外交における方法でもあってほしいと願う。

4. 統括

このセッションは、後援者を招いた一つのセッションであったが、現在ある問題を大きく捉え、それに向け一人ひとりがどういった態度を持つべきかを考えさせるものであった。一週間「平和と戦争」について考える GNLFF 本会議において、最初のステップとなったように思われる。講演終了後も、参加者たちが真剣に議論をする姿が目に入った。

一般の人々、特に学生が、今すぐ平和に向けた活動を開始することは難しい。しかし、何が問題なのかを知り、それについて考えを深めることならばできる。より多くの人々がそういった姿勢を持つことによって、世界は平和へ近づいていくのだろうと感じた。

Session3 -Post Conflict and Peacebuilding-

1. 概要

紛争後の平和構築には、社会・経済・政治など様々な側面があり、これらは「平和」、また長い目で見れば安定を維持するためには欠かせない要素である。本セッションでは、講師の国際移住機関（IOM）での実務経験を基に、社会的、そして経済的な面についてのお話をいただいた。

本セッションは、以下の2部構成で行った。

第1部 レクチャー

「紛争後と平和構築」

第2部 ディスカッション

「平和を実現させるにあたり、真っ先に取り組むべきことは何か。」

「平和構築活動が始めるにあたって最適な時期はいつか、またどのように実行されるべきか。」

「なぜ国際社会は紛争後の復興、平和構築に携わらなければならないのか。」

なお本セッションは、ウィリアム・バリガ国際移住機関駐日代表に講師を担当していただいた。

今年の本会議の参加者は、それぞれに「平和とは何か」を考えてきたと思う。講義の冒頭では、そんな彼らに、普段何気なく目にする、あるいは使っている「平和」という概念が何を意味しているのか、改めて考えさせられる問いが投げかけられた。参加者はその問いを頭の片隅に置きながら、講義を聴き、その後のオープンディスカッションに取り組んでくれただろう。

2. レクチャー

まず、講義の始めに国際移住機関（IOM）についての簡単な説明がなされた。IOM は、世界的な人の移住の問題を専門に扱う国際機関であり、平和構築においては、元戦闘員の市民社会への復帰を支援することで彼らが避難民となることを防ぎ、また同時に、彼らを受け入れる社会を支援し、地域の安定化を図るといった役割を果たしていると述べられた。

その後は、IOM の平和構築活動によって実際に誰が利益を受けるのか、また、軍事紛争により被害を受けた社会が今後処理し

文責 長谷川由斐

なくてはならない課題と、その支援をするために IOM が具体的にどのような活動をしているのかという説明へと移った。また、紛争によって影響を受けた社会の生産的な生活を取り戻すこと、個々人の物質的なニーズを満たすことは、どちらも時宜を得た処理を必要とするということが強調された。最後には、東ティモールを舞台にし、元戦闘員が市民としての生活を取り戻していく様子を映したビデオを鑑賞し、元戦闘員の支援方法について考えさせられた。

3. ディスカッション

第2部のディスカッションは、5、6人の小グループに分かれてのグループディスカッション形式で行われた。平和を実現させるための取り組みをいつから始めるかについては、戦後でいいのか、それとも戦争中から準備を始めるべきかという意見に分かれる局面もあった。また、戦後すぐに選挙を行うべきかについては、社会の混乱を回避するためには後回しにしてもいいのではないかという意見と、それとは逆に政府を正常に機能させるために行うべきだという意見が出た。また、政府の武装解除とともに、国際機関の物資供給や NPO などによるカウンセリングの必要性も挙がり、平和構築を達成するうえでは、紛争の当事国だけではなく国際社会も重要な役割を果たすとの認識が共有されていることがうかがえた。



4. 統括

本セッションが十分に機能したかといえ
ば、そうではない。参加者からは、講師が
十分に議論を発展させることができるほど
の時間が確保されていなかったことや、デ
ィスカッションにおいて、日本語と英語の
質問の意味のズレのために議論がしづら
かったという意見をもらった。今後のよりよ

いセッション作りのために改善していかな
ければならない点である。

しかし、将来国際社会のリーダーとなり、
「平和」実現を担っていくであろう、本会
議の参加者が、実際の経験に基づいた知見
を得られたことはとても有意義なことであ
る。本セッションで得た学びが、彼らの今
後に繋がることを願う。

Session 4 -How to Grasp International Relations-

文責 吉川仁

1. 概要

平和構築と一口に言っても、これには多様なアクターが複雑な形で関与していて、各々が様々なアプローチを取らなければ成し遂げられないのは間違いない。その中で、国々や、国によって構成される国際機関の果たすべき役割は非常に大きい。

国際機関・政府・コミュニティの3つのアクターと、「平和と戦争」との関わりを考えるという本会議の流れの中で、セッション4は主に国際機関と政府間の関係を取り上げた。前半のレクチャーでは、元駐米大使、現日米協会会長の藤崎一郎様に、国家間対立とそれに対する政府や国際機関の役割を中心とした講義をしていただき、後半のグループディスカッションでは国際関係に関連した3つの問いを立て、その問いについて自由にグループで議論した。

2. レクチャー

レクチャーは、「国際関係を理解するには、『リーダーの考え方』を読み解かなければならない。なぜ彼らリーダーがそのような行動に至ったのかを考えなければならない」という藤崎様のメッセージから始まった。

前半は「対立に関する myth（神話）」という表題のもと、4つの項目に分けて具体例を用いながら解説がなされた。

(1) イデオロギーと国益

米国とソビエト連邦の間に50年ほど続いた冷戦は、資本主義と共産主義というイデオロギーの対立が原因であるというのは常識である。しかし対立や抗争の原因はこれだけではない。たとえ同じイデオロギーを持っていたとしても、軍事的抗争は勃発する。例として、1969年に起きたアムール川でのロシアと中国の軍事的対立や、1979年の中越戦争はいずれもどの国もが自らの国益を追求した故の結果である。

(2) 国境

情報技術の進展や多国籍企業の発展によ

って、国境の重要性は以前と比較して薄まってきている。しかし、クレミア、尖閣諸島、イスラム国、スプラトリー諸島などの諸問題はいずれも国境という概念によって発生したものである。政府が常に自らの国益を追求する故、国境の存在は今日でも大きな役割を果たしている。

(3) 制裁と国際機関

「制裁は現実的ではなく、効果的ではない」という myth（神話）がある。しかし、過去を遡ってみると、果たしてそうだろうか。60年代当時、大韓民国よりも発展していた北朝鮮や、80年代当時、アラブ諸国で最も発展していてブラジルや、南アフリカよりも発展していたイランなどは、いずれも世界貿易から排除されたことにより衰退していった。国際的連携による制裁は、実際には一定の効果を生み出すという可能性がある。

(4) G2（アメリカと中国の二大勢力）

少し楽観的な考えかもしれないが、民主主義、人権、言論の自由など、アメリカの価値観は世界でかなり支配的になっている。こういった価値観は、軍事力よりも、人々の支持を得られるという意味で重要である。また、他国の反発が起きるので大きな勢力もそう簡単には支配的にはならないということも頭に入れておく必要がある。

以上の4つの myth（神話）を解説された後、「しかし無意識にこれらの myth（神話）が正しいと思いこむことは避けてほしい」との忠告がなされた。

レクチャーの後半ではまず、国家間対立が生じるのは主に、二つの国の勢力に違いがあり、片方がその違いを活かして国益を追求できると考えることによる、と述べられた。さらに、それを防ぐためには法律や国際的規則、別の勢力などが必要となると加えられた。

藤崎氏は、国際政治では、こういった選択肢が存在するかを考えることが極めて重

要であると続けた。例として、核兵器不拡散条約を挙げた。この条約は常任理事国でない国々にとっては明らかに不公平なものであるが、不公平であってもその条約を受け入れることは果たして結果的に良いものであるのか、という問いが投げかけられ、そういった意思決定がまさに国際政治の根幹にあると述べた。

また、国際関係の現状を維持するには常に軍事力が用いられているが、それを用いたくない場合、時間を抑止力として用いることができる場合があるということも示唆した。実際に、香港でのデモや中東でのイスラエル台頭のときには、時間が抑止力として効果的に活用されたと述べられた。

最後に総括として、

- ① 国際コミュニティは法律や安全保障体制の整備をしなければならない
 - ② 制約はあるものの、国際機関は最善を尽くさなければならない。
 - ③ 国益に責任を持つのは結局国家であり、国家が最も重要なアクターである。
- の三点を藤崎氏は強調し、講演は終了した。

セッション後に設けた質疑応答の時間だけでなく、休憩時間にも積極的に質問をする参加者が多数見受けられた。

3. グループディスカッション

グループディスカッションでは、藤崎様に事前に用意して頂いた以下の3つの問いについて、計6つのグループ内で議論を行った。

【問Ⅰ】国際連合はしばしば、ウクライナ、イスラム国、スプラトリー諸島などの諸問題の前では役割を果たせていないと言われている。国際連合を機能させる最善で現実的な方法はあるか。

【問Ⅱ】日本にある米軍基地について、安全保障と現地民の利益との間にあるジレンマをどう解決すべきか。

【問Ⅲ】一般的には、拷問や盗聴は許されるべきでないと言われているが、もし自分の家族がテロリストによって誘拐されたときでも、あなたはそれらの手法に反対するか。

【問1】については、常任理事国のシステムの改築についての意見が特に多く見られた。具体的には拒否権の廃止や常任理事

国のメンバーの変更や追加、ローテーション制の採用などである。他にも、国連の業務の透明化や金銭的負担量の振り分けの変更によって、これまで軽視されてきた国々への配慮を増やす、といったことなども挙げられた。

【問Ⅱ】については、多くの海外参加者が深い予備知識を持っていなかったため、ファシリテーターや日本人参加者が米軍基地問題の背景をある程度説明してからのディスカッションとなった。影響を受ける人数の圧倒的な差から安全保障を優先すべきという意見と、現地民の質的負担の大きさを最大限に配慮しながら代替手段を探し続けるべきだという意見の間に明確な対立が見られ、どのディスカッションテーブルでも白熱した議論が行われた。

【問Ⅲ】については、多くの参加者が「それでも反対する」というスタンスを取った。その根拠として拷問が実際にはほとんど効果的でないことや、いかなる場合でも人権は尊重されるべきであること、結果的にさらなる対立を生む可能性があること、などが挙げられた。一方で、賛成の意見も見受けられた。

ディスカッション終了後には、藤崎様から参加者に向けてのコメントがあった。

4. 統括

今回のセッションは参加者にとって非常に有意義なセッションだったと感じている。特にレクチャーで、これまであらゆる箇所 で起きた様々な対立や抗争が、体系的に原因追求した上でまとめられたことは、世界各地から来た参加者にとって学ぶことが多かったと考える。またそれらの考察から導かれ、解説された複数の定説は、今後各々の参加者が「平和と戦争」というテーマに向き合ったときにも必要不可欠で重要な考え方になるだろう。

グループディスカッションでは、本会議の一つの大きな意図である「価値観の衝突」がどの問いのディスカッションテーブルでも見受けられ、この本会議こそが提供できる、参加者にとっての貴重な収穫となったと感じている。一方で、特に問Ⅱでは、背景知識の不足により議論が浅くなってしまい、あまり現実的な議論ではなくなったという懸念もある。

平和構築とは、地球上のいかなる人間もが向き合っていかなければならない課題であり、特に国家や国際機関の果たすべき役割は大きい。今回のセッションが、その重

要性に気づき、より良い将来のために私たちがどう行動すべきかを考えるきっかけとなったならば幸いである。

Session5 -War, Peace and Media-

文責 島崎諒子

メディアの役割の変化などを軸にご講演いただいた。

1. 概要

世界のどこかで起きた争いは、メディアによって全世界に伝えられる。紛争の最前線で直接見聞きした「事実」を市民に知らせる重要な役割を担うメディアであるが、伝える者も人間そして組織であり、世の中の利害関係とは無縁ではない。将来を担うグローバルリーダーとして、メディアを通して受容した情報をどう咀嚼し、活かすべきなのか、模索することが求められる。



セッション5の全体的な位置づけとしては、本会議最後のセッションとして、参加者により近いところで戦争、平和について考えてもらう場として用意した。当セッションでは、実体験に基づいた講演と実際に過去に起きた紛争をテーマとした各国報道を比較することを通じて、これまでのセッションの講演やフィールドワークで学んだ内容について、参加者が「自分自身が何をできるか」ということを考えるためのヒントとなる内容になることを目的とした。同時に、第4セッションまで比較的「過去」に置かれていた視点を「近現在」中心のものに移し、よりセッション内の学びが今後につながることを期待した。以上のことを念頭に置き、本セッションは二部構成で行った。

第一部 レクチャー

第二部 グループディスカッション(ジグソー法)

なお、第一部レクチャーのスピーカーとして読売新聞東京本社編集局英字新聞部長の貞広貴志様を招聘し、アラブの春の時期にカイロ支局長を務めていたご経験をもとに、近年の紛争の特徴について「メディア受難の時代」と呼ばれるようになった所以、紛争における

2. レクチャー

冒頭で、貞広様はこれまでの紛争の深い分析などではなく、戦争・紛争が時代を経てどのように変わってきたかを学んで欲しいとの旨を述べた。その上で、以下の9つの戦争・紛争をケースとして取り上げた。

①冷戦(ベルリン駐在員)、②フィリピン共産ゲリラ(NPA)抗争、③カンボジア内戦、④ユーゴスラビア紛争、⑤アメリカ同時多発テロ、⑥イラク戦争、⑦チェチェン紛争、⑧アラブの春とその後の混乱、⑨ISIL

貞広様がこれまで実際に現場で見てこられた上記9つの戦争・紛争の要因や背景、またメディアがアクターとしてどう紛争に巻き込まれていったか等を「市民の眼」である新聞記者の観点から、エピソードベースでご講演いただいた。なお、講演の順序は時系列を逆に遡って行く形で(つまり、直近のものから)行われた。

講演の要点をまとめると、大きく3点の戦争・紛争におけるメディアの立場の変化が挙げられた。1つ目は、ジャーナリストは以前は誰からも敵と見なされていなかったが、最近ではテロリストのターゲットそのものと成り得ることだ。2つ目は、政府が情報を秘匿しがちになったことである。それどころか、政府そのものがメディアの報道の仕方に注意を払うようになってきた。これは、政府がメディアをコントロールしづらくなってきたことが影響している。そして3つ目が、戦争そのものの形が変化してきていることだ。例えば、生物兵器やドローンといった新しい戦争の形が出てきており、メディアにも大きな影響を与えている。

また、日本は欧米の多くの国とは異なり北大西洋条約機構(NATO)に加盟していないため、日本のメディアは欧米のメディアと比べてより多くのチャンネルを持っていることも言及され、参加者は政治とメディアの関連の一面を感じ取ったのではないかと思う。

貞広様は、講演でスライドにたくさんの写真を投影してくださり、視覚を通して記者の目から見た戦争・紛争を伝えてくださった。

3. グループディスカッション

セッションの第2部のディスカッションでは、シグゾー法と呼ばれる方法が採用された。シグゾー法は前半と後半に分かれており、以下の流れで行われた。

(1) エキスパートグループ：同様の事案に関する、各国の主要紙の報道を1グループ1国を担当して読み、グループ内で内容を確認する。

(2) ディスカッショングループ：エキスパートグループから一人ずつ集めて新たなグループを作成し、新たなグループ内でそれぞれの担当国の報道の特徴をシェアし、それらの考え方や批評がどのように異なるのかを考察する。

前半は5つのグループ「エキスパートグループ」に分かれ、それぞれのグループに割り振られた国の主要メディアが発行したイスラム国に関する新聞記事を読み込んだ。その後、グループ内で担当国の記事の内容を確認し合い、それぞれのエキスパートグループから一人ずつを集めて別のグループ「ディスカッショングループ」を作った。ディスカッショングループでは、まずそれぞれが読んだ国の新聞記事の内容やイスラム国に対する批評を互いに紹介し、国ごとの記事の違いについて洗い出した上で、記事の評価を行った。最後に、将来のリーダーとしてメディアを通じて得た情報をどのように見極めるか、また、より真実に近い理解をするには何が大切なのかについて、参加者の間で意見交換をした。

議論の要点となったのは、イスラム国に対する積極的な介入が歓迎されるか否かであった。国によって介入を積極的に認める論調の報道と断固拒否する論調の報道とが見受けられ、国ごとの歴史や経済状態、文化的風潮がどう世論に反映されているかが、様々な国の記事を読み比べることで顕著に

浮かび上がった。



4. 統括

本会議最後のセッションとして、今後の経験に落とし込みやすいテーマ・組み立てを選んだが、反省点としては、主に2点挙げられるだろう。1点目は、第一部のレクチャーと第二部のディスカッションとの繋がりが薄かったことだ。そして2点目は、第二部のディスカッションで参加者の出身国の視点を記事の評価に存分に組み込めなかったことである。

しかしながら、貞広様の講演を通じて、これまでのセッションでは理論的に語られてきた戦争・紛争を、現実には何が起きているのかという、より現実味のあるものとしても知ることが出来たのは大きな成果であった。さらに、時代によって変わってゆく戦争の形を知るとともに、未来の「戦争」の行方を考えるきっかけとなったことも大きな学びとなっただろう。情報のやりとりにおいては、与える側が可能な限り「正しい」伝え方をする努力をすべきであることは言うまでもないが、受け取る側にも相当の注意と思慮が必要とされる。このセッションを通じて、将来を担うグローバル人材として、戦争・紛争に関してメディアを通して受容した情報をどう咀嚼し、活かすべきなのか、意識するきっかけとなったならば幸いである。

Group Work

文責 橋本里奈

1. 概要

本会議では「平和」というテーマのもと、さまざまなセッションが行われた。そこで得た知識をアウトプットし、平和を実現するためには何が必要なのか参加者一人一人が見解を深められるよう、グループワークとして課題を出した。

今回のグループワークでは参加者を5つの班に分け、班ごとに、

- A. 「平和」をどう定義するか
- B. 平和の実現を阻害する要因は何か
- C. B で挙げた要因を克服するには何をすべきか

という課題に取り組んでもらい、本会議最終日に各グループが持ち時間 10 分のプレゼンテーションを行った。

2. プレゼンテーション

【A】

平和の定義として、戦争のない状態はもちろん、加えて一人一人の人権を尊重し多様な価値観や考え方を認め合っていることや、内面的な心の安定が得られていること、教育を受けられる環境にあること、個人レベルでの対人関係における調和が保たれていることなどが挙げられた。

【B】

国益の衝突、文化・宗教・価値観の違い、イデオロギーの対立、不平等性/経済格差、歴史、政府による偏った教育、プロパガンダなどが挙げられた。また、国連などの国際機関が紛争問題を解決する実力を持っていないことも問題点として挙げられた。

【C】

B の事象を克服する方法として以下のものが挙げられた。

〔国際機関〕

- ・国同士の対話の出発点を創造する
- ・紛争後に平和構築を迅速に行う
- ・軍縮条約を促進する
- ・組織間における連携した協力体制を強化する

〔政府〕

- ・特定のイデオロギーを促進しない
- ・一人一人の人権を認める（内面的かつ外面的精神の自由を認める）

- ・軍備縮小を促進する
- 〔市民団体〕
- ・NGO 等によって人権擁護を促進する
 - ・学生団体によって平和に対する意識の向上を促進する

3. 統括



グループワークは、様々な国から参加者が集う GNFL 本会議において、最大の醍醐味の一つとも言えるだろう。今年も、課題に対してどのグループも時間を忘れて非常に熱心な議論をしている姿が見られた。参加者たちは「平和」というテーマについて深く考える機会を得ただけでなく、異なる背景を持った別の参加者からの意見を聞くことで、新しい視点を学ぶことができただろう。

最終日のプレゼンテーションはどのグループも素晴らしいものであった。内容からはよく議論されたことがうかがえ、さらに自分たちの考えをただ述べるだけでなく、スライドを効果的に使うことで聞いている人たちにわかりやすく伝えようとする姿勢も感じられた。

グループワークは、参加者同士がお互いを知りあう大きなきっかけにもなっただろう。こうして議論したこと、そしてそれを通して築かれた関係が、これから一人一人の中で生きていくことを願う。

5. 観光・交流

-広島観光-

文責 信澤克彰

今年の本会議は戦後70周年であり、開催地の一つが世界で初めて原爆の被害を受けた広島ということで、3日目午後のフィールドワークでは広島平和記念公園を訪れた。

参加者は原爆ドームをはじめとして、原爆投下地点の直下である島病院前や、原爆の悲惨さと被害者の苦しみを後世に伝える広島平和記念資料館を5、6名のグループで巡った。さらに、このフィールドワークには広島に住む高校生にも参加してもらい、各施設・モニュメントに関する解説をもらった。

フィールドワーク全体を通じて、原爆の悲惨さに顔をしかめたり、深く考え込む参加者の姿が印象的だった。平和記念資料館では、被爆者の写真や遺品を見て大きなショックを受けた参加者がいて、とりわけインドからの参加者のひとは、「日本は唯一の被爆国として核兵器の悲惨さをもっと世界に伝えなければならない。私は今までこの事実をよく知らなかったから。」と語ってくれた。資料館を見学した後には参加者と高校生、それぞれの代表が花束と千羽鶴を供え、全員で犠牲者への冥福と世界の平和を祈った。

今回の企画はフィールドワークに参加してもらった高校生にとっても、世界各国の学生・教授と交流できたことが良い刺激になったようで、ひとりの生徒は、「広島で育った私たちが先頭に立って世界平和を訴えなければならない。」と話してくれた。

このフィールドトリップでは、戦争や原爆の負の側面が全面にクローズアップされたこともあって、その日の夜のグループワークでは平和の意味について改めて考え直すグループが多かった。

た。戦争の悲惨さを現代につきつけてくる広島が開催地だったからこそ得られた貴重な体験だったにちがいない。



-東京観光-

文責 加藤雅貴

TOKYO——広く外国の方から認知されていて、一度は訪れてみたい（らしい）日本を代表する大都会。時代の先端を象徴するビル・マンション群のみならず、日本の歴史と伝統を受け継ぐ街並みや人びとがともに暮らす、表情豊かな都市といえるだろう。

広島で開いた前半の本会議とフィールドワークでは、過去をみつめてこれからの平和の意義について真剣に考えた。ところ変わって後半の開催地TOKYOでは、本会議はさることながら、参加者に一旅行者としてTOKYO、そして私の知る等身大の「東京」を楽しんでもらいたいとの考えからこのイベントを企画した。

当日の朝、先導役の運営を筆頭に、6つに分かれた班ごとの観光が始まった。滞在先のホテルからバスで向かった明治神宮をスタート地点に、各班は思い思いの場所へと散っていった。定番どころはもちろん各班おさえてある一若者の街 原宿や、有名なスクランブル交差点がある渋谷、浅草寺や伝統的

な日本の食をそこかしこで味わえる浅草。また、いわゆる観光スポットではないけれど、回転寿司屋やゲームセンター、ユニクロを訪れる班もあった。

参加者は大変楽しんでくれていたようで、運営者として本当に企画してよかったイベントだと感じた。この春に大学進学とともに上京してきた私にとって、彼らの TOKYO に対する新鮮なまなざしは、どこか上京して間もなかった頃の自分と重なる気がした。けれども次第に東京での生活に慣れていくにしたがってできあがっていた、見知っていることを前提にした「東京」に対する見方が、なにもかもを目新しいものして捉える参加者の姿・視点を通じて少し変わったように思う。

本会議の開かれた 8 月はまさに真夏。蒸し暑くて、人と建物が密集する TOKYO—それらすべてをひっくるめて生の体験を積んでもらえたなら嬉しい。彼らの TOKYO と私の「東京」が短い時間ながらも重なった、素晴らしい夏のひとときだった。

-Culture Party-

文責 佐藤瑛大

本会議の魅力を引き立たせてくれるイベントは間違いなく、このカルチャー・パーティーといっても過言ではない。シリアスな場面がどうしても多くなりがちな講演やグループ・ディスカッションからいったん離れ、お互いの知らない世界・文化を純粹に知りつくしたいという思いに応えられる企画といえるからだ。

カルチャー・パーティーはこれまでの本会議でも開かれてきたが、その中身は毎回違っていて面白い。というの

も、このイベントでは参加者が与えられた時間を自由に使って自国の文化を紹介するプレゼンテーションを行ったり、練習を重ねてきた伝統舞踊を披露してくれたり、ひとつとして同じ発表がないからだ。さらに、参加者はそれぞれの国の特産品を持ち寄っては、互いの文化がうんだ珍味に舌鼓を打つ。

参加者全員の協力のおかげでパーティーは大いに盛り上がった。参加者同士が話しやすいように立食形式をとったことも功を奏し、お互いの親交を一層深めることができた。この異文化交流企画は、参加者への良い刺激になったにちがいない。

ただ残念ながら 100 点満点とはいかなかった。運営側として反省すべきことは、情報の共有、および、責任の所在が明確になっていなかったために立食に際して混乱が生じてしまったり、うまくプレゼンテーションの時間配分ができず、最後に発表したメキシコのプレゼンテーションを中断して会場を移らねばならなかったということだ。本当に申し訳なかった。

次回はこの失敗を繰り返さぬよう、カルチャー・パーティーを担当する運営の中から責任者を決めて役割分担を徹底していく。スケジュールにのっとり、全体が平等に発表できるよう、厳格な時間管理が求められる。

このように、運営側にとって改善点の多いイベントではあったが、参加者からの評価は高く、内容面をより充実していく価値のあるイベントであるとの手ごたえを感じた。今回の焼き増しに満足することなく、プログラムを練りあげてより濃密な異文化交流を目指していきたい。

6. 参加者感想

文責 鵜澤和志

参加者には、本会議終了後に無記名アンケートに協力してもらった。アンケートではハード面（食事、宿泊、交通など）とソフト面（セッション、グループワーク、観光等のプログラム）の双方について、

- ・ とても満足（Very Satisfying）
- ・ 満足（Satisfying）
- ・ 不満（Unsatisfying）
- ・ とても不満（Very Unsatisfying）

の4段階の選択肢と、それぞれの問いに対するコメント欄を設けた。以下は、このアンケート結果に基づいて作成した参加者感想の概要である。

【ハード面】

広島と東京での食事や宿泊、そして2都市間の移動については8割以上が、「とても満足」「満足」のいずれかを回答した。

一方で、「とても不満」との回答はなかったものの「不満」との回答が存在した。特に宿泊に関しては、1部屋あたりの参加者数が多くて手狭であったことを理由に挙げたものが多数見受けられた。

【ソフト面】

セッションの講演については、1～5のどのセッションについても、「不満」、もしくは、「とても不満」とする回答は皆無だった。

講演後のディスカッションについては概ね「とても満足」「満足」とする回答が多かったものの、特にディスカッションの時間不足を理由に「不満」とする回答も存在した。今回のプログラムを策定するにあたって、コンテンツ準備に注力するあまり、時間管理については十分な配慮ができなかった点は次回の本会議開催に向けて改善していくべきポイントだ。

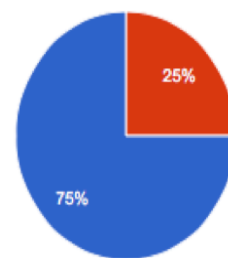
また、グループワーク課題については、半分以上が「とても満足」と回答したが、「不満」との回答も1件存在した。グループワークは本会議全体を通じて固定化された班で行ったため、班によっては満足度に差が生じたと考えられる。実際、アンケートの回答理由として班の編成に対する意見も寄せられた。

その他のプログラムとして、カルチャー・パーティーと閉会式については、「とても満足」「満足」の回答しか存在しなかった。ただ、広島でのフィールドワークと東京での半日観光については2割弱が「不満」と回答した。「不満」と答えた理由としては、時間の長さが不十分であったために希望していた場所全てに行けなかったという意見が最も多かった。

【本会議全体評価】

※青…とても満足 赤…満足

How was the GNLf Conference in overall?

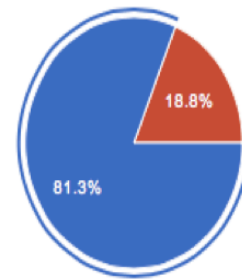


本会議全体の満足度を問う質問については、上のグラフのような結果を得た。今回初めて本会議を2都市で開催したことに加えて、これまでの本会議に比べて多忙なスケジュールであったため、プログラムに対する個別のコメントや本会議全体に対するコメントとして、時間の不足をあげるものが多かった。このことをうけて、今後は個別の満足度をもとに実施するプログラムの選択と集中を行い、余裕のあるスケジュールを組む必要がある。

課題が浮かび上がった一方で、3/4の参加者から「とても満足」、残り1/4から「満足」との回答を得ることが出来たことは、昨年度と比べて運営主体である学生本部の成長を裏付けるものだとして評価している。

最後に、運営委員に対する満足度を問う質問に対しては、8 割以上が「とても満足」、残りの 2 割が「満足」と回答し、大変高い評価をもらうことができた。この大きな要因として、GNLF の運営委員と参加者の距離感が近かったことで、参加者の要望にきめ細かな対応ができたからではないかと考える。

How were the Committee Members of GNLF?



7. 運営フィードバック

文責 青野将大

本年度の本会議の開催で浮かび上がった課題を、組織・運営・内容面の3点に分類したうえで、その詳細と改善策を検討していく。

【組織面】

・本年度の取り組み

本年度は昨年度の体制に若干の変化を加えた。海外参加者との連絡を担当するメンバーシップ局、本会議のコンテンツを準備するプログラム局、財団や会社との渉外を主に担当するパートナーシップ局の既存の3局に加えて、広報と本年度はじめて実施したクラウドファンディングを担当する戦略局を新設し、計4部門からなる体制をとった。

また、週1回のミーティングでは主に進捗確認を行い、昨年度から実施していたミーティング持ち回り制度を継続した。

・課題と改善策

戦略局に関して、クラウドファンディングは成功に終わったものの、新規の部局だったため担当領域が不明確でうまく仕事が割り振られなかった。これをうけて、来年度は戦略局の役割を明確にしていく。

総評としては、参加国数の増加や2都市開催によって規模が拡大した本会議を質の面で向上できたが、昨年度同様、組織の縦割り構造の弊害が生じてしまった。各局の中で、下の代への仕事の引き継ぎがうまくいかず、二度手間になってしまうことが多々あった。また、どの局の担当とも言い難いタスクを会頭や事務局長が抱え込んでしまったために、彼らの負担が他の運営メンバーと比べて大きなものになってしまっていた。これらの改善策として、ミーティング時の各局の進捗報告をより詳細に行って情報共有を図るとともに、新体制発足時に長期的なタスクスケジュールを作成し、大きなタスクをする際に前もって他局に支援を要請するといった対応を現時点で検討している。

【運営面】

・本年度の取り組み

本年度は、これまでの1ヶ所開催を変更

して広島、東京の2カ所での開催という形にした。本会議前日から運営メンバーの一部が現地入りして会議の準備をするなどの雑務をこなした。本会議中は毎晩運営メンバーで集まり、その日の反省、翌日のロジスティックの確認などを行った。東京では予算の制約から、ホテルに宿泊する運営メンバーをシフト制にし、残りのメンバーには帰宅してもらって翌日ホテルで集合する、という対応をとった。

・課題と改善策

本会議中、当日のロジスティックの変更が一部にしか共有されていなかったため、スケジュールについて運営間で認識が異なったり、日程に関する参加者からの質問に答えられない運営がいたなど、運営側の不手際な対応がみられた。ロジスティック変更の可能性を前日の会議でしっかりと全体で共有したり、あるいは、当日変更した場合でも速やかに全体に伝達することが今後求められる。

東京でのホテル宿泊シフト制については、結果として運営と参加者の交流の機会を減らしてしまったうえに、運営の負担を増大するものであったため、来年度以降は廃止するのが望ましい。このほか、運営と参加者間のコミュニケーションをとる機会が限定されていたり、運営の仕事に追われて講演者の話をあまり聞くことができなかったなど、運営メンバーにとって本会議を通じて得られるものが少ないという不満が散見された。運営が参加者により近い立場で本会議に関われるようなプログラムのありかたを真剣に検討していく必要がある。

今回は夜間外出や飲酒は原則禁止としたが、参加者からは外出したいという要望が運営側に頻繁に寄せられた。参加者がほぼ全員成人であったことを考慮すると、この規則は厳格すぎたと思われる。運営の付き添いという条件下では認めるなど、多少制限を緩和することも来年度考えられる。

【内容面】

・本年度の取り組み

形式としては従来と同様に、セッション毎に講演者をお呼びして平和について講演していただいた後、参加者に事前に取り組

んでもらった課題をもとにしたグループワークを行った。また、教授はアドバイザーの立場から議論に参加していただいた。

新しい試みとしてセッションの他に、広島で現地の高校生と原爆資料館や平和記念館を訪れたり、広島記念公園の周辺を彼らに案内してもらおうフィールドワークを実施した。

文化交流の面では、カルチャー・パーティーを本年度も開き、各国参加者が自国を紹介するプレゼンテーションを行ったり、郷土料理を用意したりするなどして、参加者同士の親睦を深めた。

・課題と改善策

まずセッションについてだが、参加者の中には時差ぼけが解消されず、体調を崩した人がいた。また、ベジタリアン用の食事

やハラル料理が他の参加者のものに比べて見劣りするものになってしまい、参加者の一部からは不満の声が寄せられた。これらは運営側の事前準備が不十分であったのが最大の要因であったと反省する。

今回はじめて高校生と一般参加者の交流を図る企画を実施したが、高校生と海外参加者が話す機会が少なく、交流という点では当初の目標通りにはいかなかった。来年度以降も行うのであれば、運営が間に入って円滑なコミュニケーションの手助けをするといった対応が求められる。また、酷暑の中での長時間の移動であったために数名の参加者が軽度の熱中症になってしまった。当然のことではあるが、フィールドトリップの最中に参加者の体調に変化がないか、各運営メンバーが注視していくことでそのような事態が起きないようにしていく。

第3部 地域会議

1. 開催概要

GNLFはネットワーク拡大の要として団体創設当初から「地域委員会設立・地域会議開催」を構想していたものの、実現に至ったのは本年度が初めてである。

少数の運営メンバーで本会議の成功を最優先させる日本学生本部が、並行して地域会議を運営するにあたって数多くの課題があった。オンラインを通じてしか対話できない地域委員とどのように信頼関係を構築し、役割分担を決めるのか。「サークル文化」を持たない国の地域委員会の活動をいかに持続させるのか。一つ一つの課題を解決しながら試行錯誤を重ね、地域会議実現に至るまで4年の歳月を要した。

メキシコ地域委員会は2014年ブルガリア大会の参加者を中心に設立され、1年に及ぶ準備期間を経て地域会議開催にこぎつけた。テーマ設定やプログラム設計、講演者招待、参加国選定等はすべてメキシコ委員会側に一任した。一方で日本学生本部は、ノウハウを生かしてメキシコ側から提示されるコンテンツ案にアドバイスをしたり、地域会議に運営メンバーを派遣してマネジメント面でサポートした。

＜会議名＞：GLOBAL NEXTLEADERS FORUM REGIONAL CONFERENCE MEXICO

＜主催団体＞：グローバル・ネクストリーダーズフォーラム メキシコ委員会

＜会期＞2015年6月10日～14日

＜参加国（五十音順）＞
グアテマラ/チリ/日本(本部大使)/ブラジル/メキシコ(ホスト国)

＜議題＞ Sustainability in Latin America

2. セッション概要

-Session1-

近年、国境をまたがる問題に周辺地域の国々が共同で対処する動きが活発になってきている。とくに今回のメキシコ地

域会議の参加国の多くは、国内に豊富な天然資源を抱えていて、持続可能な開発が将来の資源枯渇の問題を克服していくうえで共通の目標となっている。

このことを前提に、中南米地域において

① 現在どのような国家間の取り組みがなされており、

② その取り組みを妨げる要素は何かについて、次の3名の専門家に登壇していただいた。

・Dr. Jose Sarukhan, National Coordinator of CONABIO

・Edith Robledo Munoz, Director of Sustainable Development of the Mexican Agency for International Development Cooperation (AMEXID)

・Simone Lucatello, full-time researcher at the Research Institute

-Session2-

地球温暖化に伴う気候変動は、異常気象や生態系の変化といった形で中南米地域に直接的な影響を及ぼしはじめている。こうしたなか、現在の国際情勢がどのように地球温暖化対策に取り組んでいて、中南米地域がどのような国際的な役割を果たしているのかについて、気候変動の専門家3名を招いた。

・Andres Avila, Academician of the Universidad Nacional Autonoma de Mexico

・Gabriela Malvido, General Director of Climate reality Project Mexico

・Severino Jaime Romo, Project and Markets Manager of CONAFOR

-Session3-

資源産出国の多い中南米の地域経済を支えているのは新興国の資源需要だ。中南米が長期的な観点から、今後枯渇の予想される天然資源の輸出に頼った経済構造を維持できるのか、そして短期的な観点では、需要に応えるだけの資源開発と自然環境の保護とをどのように両立させていけば良いのかについて、経済と環境保護の専門家を招いて議論した。

・Carlos Munoz, Coordinator of

Economic Research in the Institute
Mario Molina

- Alexandra Ortiz, Program Leader of the Inclusive and Green Growth Program of the World Bank in Mexico
- Karina Caballero, Academic of the Universidad Nacional Autonoma de Mexico



-Session4-

中南米には石油や再生可能エネルギーをはじめとするエネルギー資源が豊富な国がある一方で、そうした資源に乏しく、電力などのインフラ面で資源がうまく分配されていない国も多い。中南米のエネルギー資源にまつわる現況を、3名のエネルギー専門家などの話を聞いた。

- Jose Luis Fernandez, Executive Director of the Institute of Electrical Research
- Lydia Paredes, General Director of the National Institute of Nuclear Research
- Isabel Studer, Director and founder of the Global Institute of Sustainability

-Session5-

近年の中南米を取り巻く諸問題—人口増加に伴う公平な社会サービスを求める声の高まりや気候変動、森林破壊—は、長期的に地域の経済発展のみならず社会のかたちそのものを変えていく可能性をもっている。これらの課題に対し、持続可能な開発モデルがどう解決する手段となりえるのか、講演者 Rodolfo Godinez, Director of political, cultural, social and environmental rights of the CNDH による話を聞いた。

-Session6-

大都市への急速な人口流入が進む中南米

諸国では、貧困・住宅不足・交通インフラの未整備といった問題の解決に加えて、水道・エネルギー等の社会サービスを効率的に提供可能な都市づくりが急務となっている。都市部の健全な発展と自然環境に配慮した社会モデルの構築が国と地域、ひいては世界の発展につながっているだけに、中南米の政治や都市計画といった広範な領域にまたがる専門家3名を招いた。

- Jonas Vazquez, Founder of Communications and Public Relations of Comunica la Ciudad
- Bernardo Rivera, Founder of Espacio Progresista A.C.
- Erik Vittrup, Representative of UN Habitat in Mexico

-Activities-

- SWOT Analysis:

ある問題の解決策を導き出すために、外部環境と内部環境を「強み、弱み、機会、脅威」の4つのカテゴリーで要因分析するケーススタディの方法である、SWOT Analysis と呼ばれるワークを行った。テーマ：「チリの銅について-持続可能性と絡めて」

持続可能な開発は多面性も持つ課題であり、政府、コミュニティ、業者と様々なアクターについて考慮しなくてはならないため解決策を導くのは難しい。どのグループも多国籍企業との関わり方に課題意識を持っていたため、「政府主導」「国営」等のキーワードを頻繁に挙げていた。

また、持続可能性というテーマだったため、どのようにしたら水資源を守るかを念頭に置いた政策も多く立案されていた。

- シナリオ別ワーク

未来の decision maker としての具体的な提案をして引き出すためのワークを行った。以下3グループに分かれて15分間の議論→全体にプレゼン→フィードバックタイム→フィードバックを踏まえた提案修正という形式で進行された。

- 1.ヤスニ国立公園の石油開発放棄について
- 2.Sonora river の有害廃棄物について
- 3.シエラアルタでの森林伐採、希少種の乱

獲

【例】ケース 1 で出た解決策

- ・国際社会からの「全面放棄は反対」というプレッシャーに負けない
- ・この計画によって孤立してしまった地区をフォローするべき
- ・持続可能な開発についての啓発活動、教育を NGO がもっとするべき

・最終プレゼン

この会議で講演やアクティビティーを通して得た成果をアウトプットしてもらうためのワークとして、最終日は学生達によるプレゼンテーションが行われた。参加者は 3 グループに分かれ、事前に課された自国の開発問題についてのリサーチをもとにグループワーク、プレゼンテーションを行った。それぞれ
経済的側面（代替可能エネルギー）
環境的側面
社会的側面
をテーマに、プレゼンテーションを行った。他国参加者に自国の状況を共有し互いの相違点を見つける機会になったと、参加者の間で好評のアクティビティーとなった。

3. 統括

GNLFF として初めて開かれた地域会議は大きな成果をあげたといえる。会議後、ブラジルとチリで新たな地域委員会が設立される運びとなり、当地域会議は「GNLFF ネットワークの拡大」という当初の目的を果たした。コンテンツについても参加者の満足度を高める工夫が随所にみられ、海外委員と共につくり上げることになる 2016 年本会議開催に向けて自信を与えるものであった。ただ成果の反面、今後の地域会議運営への課題も多く浮かび上がった。日本学生本部には地域会議の担当部局が存在せず、個人ベースでの対応が中心となり、日本側の管理、サポートが十分なものであったとは言えない。現地におけるスポンサー獲得の難航、会議本番でのタイムスケジュール遵守の不徹底など、海外委員会のマネジメント面でも課題を残した。

今回の会議で見えた課題を解決し、今後の地域会議を円滑に運営するため、来期より地域会議担当部局を新設することとなった。地域会議の開催はネットワークの拡大を飛躍的に推進する要素であると確信している。広がったネットワークをより強固なものにすることを目指し、今後とも活動を進めていきたい。



第4部 統括

1. GNLF2015 統括

先述したように GNLF には 3 つの柱、「経験」「知見」「人的ネットワーク」があり、GNLF2015 はその中でも「人的ネットワーク」がこの団体を長期的に支えていくものであると考え、重視して活動を行ってきた。その観点から私たちの今年度の活動について、総括をしていく。

GNLF のメインイベントたる本会議では人的ネットワークの拡充は十分でなかったように思われる。去年 9 カ国だった参加国は 1 カ国増えたとはいえ、私たちが本来設定していた目標にはとどかなかった。経済的な部分が大きな障壁となるとはいえ、次年度以降、改善していくべきところの 1 つであると考え。一方で例年の国内開催とは異なり、開催地を 2 箇所にしたり、あるいは広島観光で高校生とコラボレーションをするなど、いくつか新しいことに取り組んだ点は経験値として糧になるだろう。また昨年度参加者が 2 人ほどわざわざ日本にきて顔を出してくれたことも「人的ネットワーク」の観点からは非常に評価できることだと考える。今年度参加者のなかにも本会議の承知に積極的なものもあり、今後のネットワーク強化への期待は持てそう。

また、初の試みとして 6 月にはメキシコにおいて地域会議が開催された。これもネットワーク拡充のための大きな足がかりであるといえるが、まだ検討していかなければならない部分は多い。今回の反省点を検証しつつ、地域会議と本会議の関係を含め、この団体の構想・理念と照らし合わせながら今後の展開を考えていく必要があるだろう。

国内イベントも第 2 回を開催し、民間外交推進協会様とのイベントも第 2 弾に突入した。その他現在計画中の企画を含め、1 つ 1 つの活動が有機的につながっていくことが今後の目標となる。

もちろん、今までも、これからも GNLF の核は本会議にある。私たちの代の反省を踏まえ、次代以降のメンバーが本会議の質を極限まで高めていくことを期待してる。そして GNLF が今後より発展していくことを願ってやまない。

2. 会計報告

グローバル・ネクストリーダーズフォーラム学生本部 2015 年度会計報告 2014 年 10 月 2 日から 2015 年 10 月 1 日まで

科目	金額(円)	備考
I. 収入の部		
1 助成金収入	¥1,750,000	財団等の詳細は報告書に記載
2 協賛金	¥650,000	企業等の詳細は報告書に記載
3 参加費	¥4,478,787	海外参加者1200米ドル、日本人参加費70000円
4 個人協賛	¥225,000	
5 クラウドファンディング	¥262,280	
6 報告会参加費	¥10,500	
当期収入合計(A)	¥7,376,567	
前期繰越収支差額	¥11,677	
収入合計(B)	¥7,388,244	
II. 支出の部		
①本会議関連費		
1 参加者渡航費	¥3,333,374	参加者の航空費・航空費関連手数料
2 日本国内交通費	¥871,057	その他国内移動費
3 施設利用費	¥2,670,292	広島ピースホテル(宿泊費/朝・夕食費) 晴海グランドホテル(宿泊費/会議室利用費/朝・夕食費) 広島YMCAセンター
4 食費	¥103,663	昼食代・報告会食費
5 雑費	¥368,322	記念品制作費・備品購入費
②団体運営費	¥30,437	ドメイン代・新歓費・印刷費・雑費
当期支出合計(C)	¥7,377,145	
当期収支差額(A)-(C)	¥-578	
次期繰越収支差額(B)-(C)	¥11,099	

3. ご連絡先

組織体制は 2015 年 10 月 1 日をもちまして、役員などの改選を経て、2016 年度の組織体制に移行いたします。

グローバル・ネクストリーダーズフォーラム 学生本部
〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-6 アトラスビル 6 階 IBIC 本郷内
公式ホームページ <http://gnlf-web.p2.bindsite.jp/>
メールアドレス gnlf-hq@g-nextleaders.net

[報告書、GNLF2015 に関するお問い合わせ]
GNLF2015 事務局長 上代菜由子 jodai@g-nextleaders.net

[報告書、GNLF2016 に関するお問い合わせ]
GNLF2016 事務局長 田久保彰太 takubo@g-nextleaders.net